

4

次の文章は、「私」が子どものころの話です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

本当に長い間、私は息をつめて、二列のつつじの群れをながめていた。新しい道。美しい道、つつじの道。

やがて、じっと見ていることにあきると、私は花が欲しくなった。^① 原っぱや道ばたの雑草以外は、取ってはいけなさと教えられていたので、つつじも手を出してはいけない花なのだ。でも、私も友達も弟の進も、^{すすむ} ちょいちょいつつじの花をむしりとしては、ラッパのように口にくわえ、おしりの部分のかすかに甘いミツをすうのが好きだった。

つつじはどこにでもある。花もたくさんつく。一個二個三個取っても、^{だれ} 誰にもわからない。七歳も六歳もそう考えた。実際、見^②とがめられることは、まずなかった。

私は一番おしげのない感じのオオムラサキをつんだ。^③ ほんのちょっとだけ、チュツと甘く、すぐに味のしなくなる花。つつじのミツをすう時は、絶対に一つだけではすまなくなる。私は次々にオオムラサキをむしっては、味見をしてすてた。そんな風に、短いつつじ並木の中をはしからはしまで歩いてしまった。

何気なく、ふりむいた私は、オオムラサキの花が点々とつながる、濃い桃色の道しるべに目を見はった。へびのようにきまぐれな曲線だ。左右の花をつんで、私がちよこちよここと歩いた道を、ピンクの線がなぞっている。

私は胸がどきどきした。自分がやったことではない気がした。証拠を残したなど思った。

(どうしよう)

このままにしておいたら、誰か大人がやってきて、花をつんだことを怒るかもしれない。^③ でも、ひろってしまふのはいやだった。知らない間に出来た花の道しるべは、どうしようもなく、私をわくわくさせたのだ。何か特別な意味があるような気がした。たとえば、物語の中の大好きな人達を、ここに連れてきてくれるような……。

私はすっかり夢中になった。

(注) オオムラサキⅡつじの種類の一つ。

(佐藤多佳子「五月の道しるべ」による。)

一 線部①「私は花が欲しくなった」とありますが、それは何をするためですか。次の□に当てはまる言葉を本文中から五字で探し、抜き出しなさい。

た め。

二 線部②「見とがめられる」とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 視線を離さないで見続けられる。
- 2 怪しいと見て問いただされる。
- 3 あなどって軽く扱われる。
- 4 立派だと感心される。

三 — 線部③「でも、ひろってしまふのはいやだった。」とありますが、それはなぜですか。次の1から4までのうち、最も適切なものをつ選びなさい。

- 1 花の道しるべは苦勞して作ったものなので、ひろう前に弟たちに見せて自慢したい気がしたから。
- 2 花の道しるべの曲線がヘビのように見えたので、不吉な感じがして触りたくない気がしたから。
- 3 花の道しるべをながめっていると、自分に何か心浮き立つことが起こるような気がしたから。
- 4 花の道しるべから早く離れないと、大人に見付かって怒られてしまふような気がしたから。